

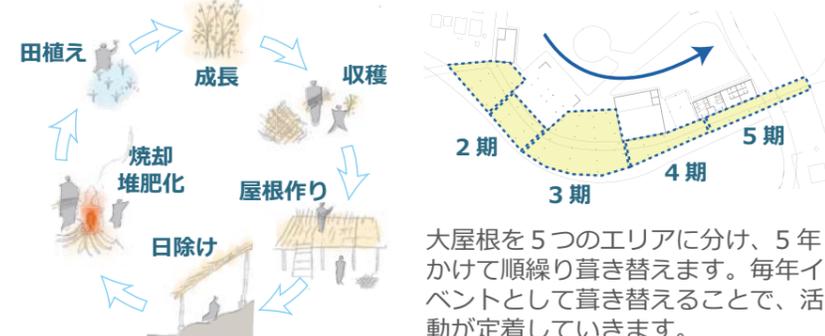
循環の集落 ~大きな循環の中に身をおき、楽しむための木造建築群~

雨が集まり川となり海に注ぎ、雲となってまた大地に降り注ぐ。ときに激しくときに豊かな水の循環は、様々な生物のくらしと結びついています。ここでは、身体を介して水の周りに生息する生き物と触れ合う場所を提案します。季節や天候で変わる「流れと淀み」それらが育む生態系を身近に感じられる居場所をめざしました。

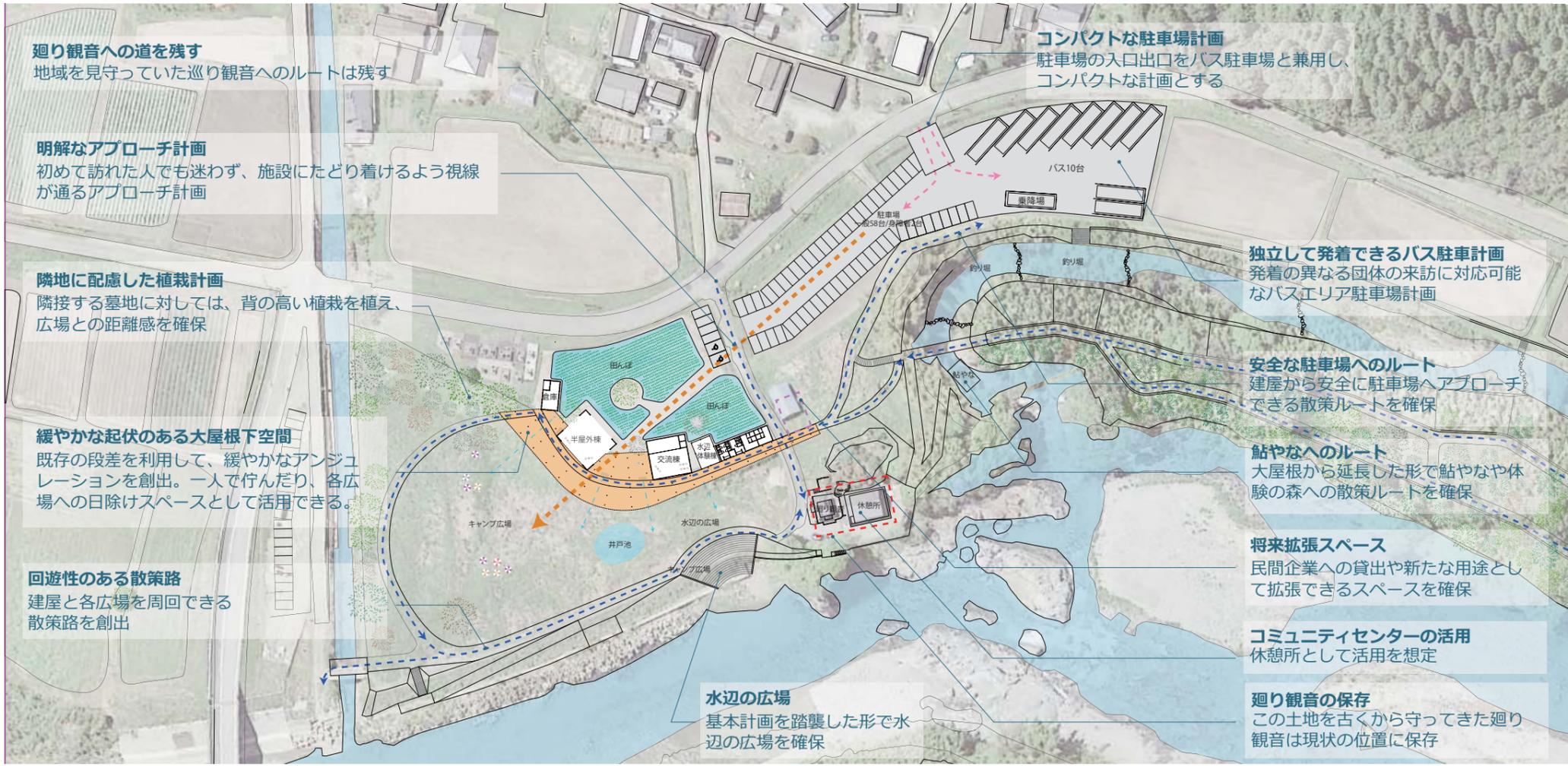
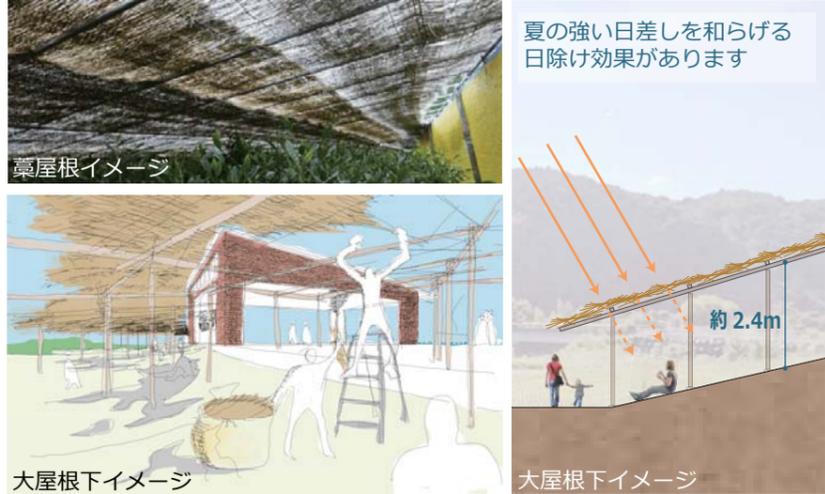


地域に根差した「循環」する公共の建築【設計コンセプト】

「県が建て、運営する建物」ではなく、村民が日頃から関わりを持てる公共の場を目指します。相良村で毎年獲れる水田の藁を基に、村の人たちで大屋根を更新するイベントを通じて、自分たちの心の拠り所となる公共の建築を目指します。



大屋根を5つのエリアに分け、5年かけて順繰り葺き替えます。毎年イベントとして葺き替えることで、活動が定着していきます。



廻り観音への道を残す
地域を見守っていた廻り観音へのルートは残す

明解なアプローチ計画
初めて訪れた人でも迷わず、施設にたどり着けるよう視線が通るアプローチ計画

隣地に配慮した植栽計画
隣接する墓地に対しては、背の高い植栽を植え、広場との距離感を確保

緩やかな起伏のある大屋根下空間
既存の段差を利用して、緩やかなアンジュレーションを創出。一人で佇んだり、各広場への日除けスペースとして活用できる。

回遊性のある散策路
建屋と各広場を周回できる散策路を創出

コンパクトな駐車場計画
駐車場の入口出口をバス駐車場と兼用し、コンパクトな計画とする

独立して発着できるバス駐車計画
発着の異なる団体の来訪に対応可能なバスエリア駐車計画

安全な駐車場へのルート
建屋から安全に駐車場へアプローチできる散策ルートを確保

結やかなへのルート
大屋根から延長した形で結やかなや体験の森への散策ルートを確保

将来拡張スペース
民間企業への貸出や新たな用途として拡張できるスペースを確保

コミュニティセンターの活用
休憩所として活用を想定

廻り観音の保存
この土地を古くから守ってきた廻り観音は現状の位置に保存

水辺の広場
基本計画を踏襲した形で水辺の広場を確保

七つの循環【計画骨子】

- 1. 風景の循環 水田**
既存の水田を一部残し、相良村の里山風景と繋げ、風景の循環を感じられる場所を提案します。
- 2. 水の循環 水の流れに触れる**
春から夏の水田、農業用水路、雨の日に現れる小川、井戸端広場、川辺など、ここに水の循環の中継地点をいくつか設け、その一つ一つに小さな生態系が生まれる仕掛けを作ります。
- 3. 生物の循環**
稲という植物、その周りに暮らす生き物、川辺川までの水の経路の途中に暮らす生き物を感じることができます。
- 4. 素材の循環 藁をつかう**
稲藁でできた日除けの大屋根。秋に近隣の田から稲藁を集め、地元の子どもと一緒に屋根を葺きます。村民が関わり、集うきっかけを作ります。
- 5. 活動の循環 みんなでつくり続ける大屋根**
大屋根を5つのエリアに分け、5年かけて順繰り葺き替えます。毎年イベントとして葺き替えることで、活動が定着していきます。設計者も指定管理者として、有機的な大屋根の維持管理に継続的に関わります。
- 6. 森の循環 地産地消の木材利用**
使用木材は県産材とし地産地消を図ります。地元の大径木の活用、歩溜まり良い木取りなどで、コスト削減を目指します。
- 7. 技術の循環 木造軸組の開かれた技術の冗長性**
最長6メートルの木材で、大きな重機を使わない構法とします。在来木造の技術を用いることで地元の施工者が新築、増築、保守・メンテナンスなど様々な段階に主体的に関わることができます。



循環の集落 ~大きな循環の中に身をおき、楽しむための木造建築群~

既存の田んぼの形を整えた上で活用し、里山風景のランドスケープを作る。田と藁屋根の運営・管理については、設計者が指定管理者と協力しながら、循環の風景を維持していく。

小さな生態系が生まれる外構計画



集落のような、みんなが集まる建屋計画 [建物平面計画 1/500] 自然と近い建物群の特徴 [技術的計画]

構造形式
熊本県産の杉・桧を使用した在来木造スパン（一部6mを超える箇所は、県産流通製材を組みあわせトラス構造、平屋の藁屋根 部分の基礎は、コストを最小とする簡易な直接基礎として計画）

季節や天候で変わる「流れと淀み」それらが育む生態系を身近に感じられます
小さな生態系が生まれる田んぼを残します。

倉庫棟はキャンプ広場に近い位置に計画します。
半屋棟は建物の中心に設置して、田んぼとキャンプ広場の視線の抜けを確保します

田んぼの間を通るアプローチで身近な自然を感じつつ、建屋や広場へのアプローチとしての演出をします
田んぼは田んぼ沿いに建てられ、雨水は水田に向けて流れていきます
各棟をつなぐ通路は、段差が生じないレベル設定とします

外に居場所を作る大屋根
気持ちの良い日に外に居やすくなるための藁の大屋根。有機的な素材が適度に直射光を遮り、土手状の床に木陰のような陰影を作ります。それぞれの棟をつなぎ、北川敷地への将来的拡張も見据えた配置です。キャンプや水辺の広場を結ぶ動線ともなります。

水辺体験棟	114.86㎡
交流棟	119.24㎡
半屋外棟	139.12㎡
倉庫棟	37.26㎡
合計	410.48㎡
屋根下	730.38㎡
全体面積	1140.86㎡

自然を身体で感じる建築
この場所を五感で感じるために、外部の居場所を増やし、快適な時期には開け放って外と一体化できる設えとします。外壁に使われる素材は、物性を表した形で表現し、内装材は県産材等の温もりを感じられる使い方をします。

自然の水や熱を活用
トイレ・シャワーには、井戸からの井水と雨水を活用します。夏は水田側の開口部と片流れの上部の重力換気によって、水を渡る冷気を建物にとりこみ、冬は廊下式空調エリアを限定し、開口部や外壁の断熱性能を確保した上で、秋に葺き替えた廃材の藁を燃やして暖をとります。

川辺川を楽しむ
出展：広報さがら 2023年11月号

井戸の水
雨水
焚火

外壁材の表情の一例
川辺川の風景

自然と共生された風景を五感で感じることができる建屋計画 [断面計画 1/500]

川のせせらぎや心地よい風、鳥の囀りや席の声、稲刈りの香り等、相良村に漂う自然と共生された風景を五感で感じることができる施設を目指します。

大屋根下は高さをおさえ、一人でも佇めるような計画とします

自然の理を活用する形
光と風と水を無駄にしないように、自然の通風と採光と集水を積極的に活用します。外の環境をよく感じとり、使い手自らが窓やカーテンをこまめに開け閉めしやすい建築を目指します。

高さの異なる複数の分棟形式の建物が集まり、集落のような設えとします

水辺の広場
川辺川
水辺への階段
基本計画に沿い、川辺川への水辺の階段を計画します

台地に建てる
豪雨災害を忘れず、水との関わりを見つめ直すために、災害時の増水を選び、想定敷地の台地の上に少し高上げた場所に建物を配置します。建築材料は、汚れや破損に対して懐の深い自然由来の材を用います。

断面イメージ (1/500)
概算工事費：190百万円